

タイトル：令和元（2019）年度 教育セミナー（第15回）
日時：2019年9月19日（木）～22日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階大会議室（303）

「後期マムルーク朝エジプトにおける自然災害と都市 ナイルの水害対応とその認識」

三橋咲歩（奈良女子大学大学院人間文化研究科 人文社会学専攻歴史学コース博士前期課程2年）

このセミナーへの参加は昨年に続き2回目でした。思い切って参加した前回は、様々な分野の先生方や学生との議論がとても面白く、修士論文のテーマを決めあげていた自分にとって非常に刺激的な4日間だったので、「修士論文を書く来年はぜひ発表に挑戦しよう」と心に決めての参加でした。それでもセミナーが始まるまではとても緊張し、不安な気持ちでいっぱいでした。そんないち発表者としての感想が、来年以降参加を迷われている方の参考になれば幸いです。

今回初めて学外で、様々な分野の聴衆の前で研究発表する機会を頂いたことは、貴重な経験になりました。修士論文で書くつもりをベースに発表をしようと考えてはいたものの、いざ40分の発表時間で自分の研究のオリジナル性や面白さを伝える、かつ歴史学分野以外の人にも分かりやすく説明するというのは思っていたよりも難しい作業の連続でした。発表の機会は最終日であったにも関わらず、結論部など練るべき部分をあちこちに残したままになったことには後悔が残っています。実際に発表してみて、リサーチクエスションの立て方や自分の主張したいオリジナルの部分をいかに示すかといった根本的な問題や、学問の分野や専門とする地域・テーマが異なる聴衆に対しどのようにプレゼンテーションするかという点について、受講生からも先生方からも鋭いご指摘や意見を頂くことができ、自分の抱える問題に自覚的になることができました。また、私の関心がアラブ史であることや普段の研究環境から、研究方法やテーマとして参考にしてきた先行研究は中東圏やヨーロッパ圏のものが多かったのですが、中央ユーラシア圏の近現代研究にも参考にできるものがあるよ、ということも教えていただき、地域や時代にとらわれず視野を広く持つ重要性を改めて認識しました。

先生方の講義や他の受講生の方の発表、それに続く議論も大変刺激的でした。特に、今回は受講生による研究発表がすべて歴史学分野であったため、発表者に向けられる質問や先生方からのアドバイス、議論展開は、どれも自分の研究や発表ではどうだろうか、と振り返る時間になりました。また先生方による講義では、普段の環境では触れる機会がほとんどない分野・地域の研究についても知見を得ることができました。様々な話を聞く中で、「中東」「イスラーム」という言葉には実は多様な地域や時代、言語圏、問題が含まれているということを再認識するとともに、こういった言葉の使い方の難しさも感じました。

もしセミナーへの参加を迷われている方がいらっしゃれば、思い切って飛び込んでみることをお勧めします。アドバイスすることがあるとすれば、研究発表のレジュメなど提出物は早めに出すこと、議論には臆せず積極的に参加すること、でしょうか。始まるまではとても緊張すると思いますが、いざ始まってしまえば知的好奇心がそそられることの連続です。

最後になりますが、セミナーを企画・運営して下さったAA研の先生方、千葉さんをはじめとするスタッフの皆さまに感謝申し上げます。4日間大変お世話になりました。本当にありがとうございました。